

かたつむり騒動始末記

齊 藤 岩 雄

1. 毒舌家の好資料

さきに「かたつむり騒動」の一文を本誌に書いたところ、貝類研究家諸氏からいろいろの貴重な御意見や御感想をいただいた。これら御意見の多くは、いうまでもなく「かたつむり騒動」に記した「イセノナミマイマイ」についての御意見であるといってよい。

実は私が、この「かたつむり騒動」を書いた意図は、貝類諸兄に「ひと騒動起こしてやろう」などと思って書いたのではない。あくまでも通俗的な続編ものとして書いたものである。

「かわいい“でんでんむし”的世界も、調べてみると他の生物と同じように、いろいろの問題があるものだ。」

といったことが理解されればそれでよいと思った。もう少し欲をいえば、“でんでんむし”に関心をもち、庭の石や垣垣を無心にはいまわる“かたつむり”を窓ごしにながめて、今まで以上に親しみを持って見ることができれば、それでよいと思ったのである。

ところが、貝類諸兄からは「イセノナミマイマイ」か、あるいは「ギュリキマイマイ」か、といった判断もさることながら、実はそれ以上に内容はエスカレートされていて、わが国の蝸牛全般についての研究のありかたとか、あるいは分類のしかた等にまで及んでいるのをみて私は驚いた。むしろ、そういう意見がはるかに多かったといつてもよいであろう。

「陸貝の名まえについては、われわれ素人にとって、どうしてもスッキリしない点が多い。君の文でもわかるとおり「イセノナミマイマイ」と「ギュリキマイマイ」のどちらにするかは、そのよい例ではないか。」

といった意見もある。また、

「近ごろは形態を主として名をつけているのか、それとも、解剖を主として名をつけているのか、一体全体どちらを主として名をつけるのかわからない。」
などという意見もとび出してきた。

なにしろ、地方にいる素人の貝類研究家諸氏といえば、通俗的ですなおに聞えるが、どうしてどうして、素人などという言葉は通用できそうもない諸氏である。かつて吉良氏のいわれたとおり、地方にいる貝の天狗どもである。この大天狗、小天狗の諸氏が「かたつむり騒動」を読んで、「この田舎天狗め、思い切って書いたぞ！」と喜んだのだから大変である。それでなくても、

いつ毒舌をまき散らすかわからない連中である。私はうっかりして、これらの天狗諸氏に好材料を提供したようになり、喜んだ天狗諸氏は、血わき、肉おどるありさまで、私は本当に恐縮した。

私は、この始末記を書くにあたって、こうした毒舌家諸氏の意見を託しながら「かたつむり騒動」の一件に終止符を打ちたいと思い、この一文を書くことにした。

2. 蝸牛の諸問題

なにしろ、毒舌については天下御免の悪友諸氏である。いいたい放題、勝手気ままに熱をあげ、いい気になっている自称大天狗先生もある。この先生方の御意見はこうである。

「『キタノチビクロイワマイマイ（仮称）』の卵を孵化してみると、それから生まれた子は、どれもこれもが『イセノナミマイマイ』ばかり飛び出してくる。こんどは、この『イセノナミマイマイ』を飼育し、孵化してみると『ギュリキマイマイ』に早変りてしまっている。これくらいの変態（芸当？）はありそうですね。なにしろ、われわれの住む世界は、もう月旅行に出かける時代です。“かたつむり”の世界でも、これくらいの騒動は、平気であちらこちらに起きそうな気がしてならない——。」

これなど毒舌の筆頭であろう。

ついで、こんな意見もある。

「もし同じ種類の“かたつむり”を、何千何百と並べてみると、その両端はだれが見ても、明らかに別種であると区別することができる。しかし、その中間のものになると、どう判断してよいか苦しむものである。特に移動範囲の小さい陸貝が、棲息地の諸条件に左右され変化しているからなおさらである。これを急いで新種としたり、あるいは、亜種としたりするのが、われわれ素人としては、そのようにあまり細かく分けることは反対である。」

このような意見が一般的に多いようであった。

また、

「“かたつむり”については『産地がものをいう』といわれている。この基本的な考えに立っていること自体、われわれ素人には疑問を持つのである。A地だから○○マイマイであるという。もし、それがB地だというと、それなら××マイマイであるという。われわれ素人には全くわけがわからない。」

と、悲鳴をあげた意見もあった。

また、

「最近では、“かたつむり”そのものが、広域的に各地に移動繁殖している日本である。それなのに『産地がものをいう』の原則で主張されると、無理な分類が出てくるのではなかろうか。」

従って、われわれ素人には、いつまでたっても疑問が残るのである。このあたりで思い切って、整理統合すべきでなかろうか。」

といった建設的な意見も舞い込んできた。」

また、こんな悲鳴を訴えてきた貝友もいる。

「最近の学者先生の中には、新種新種と血まなこになっている人がいるのではなかろうか。おそらく、そういう先生が地方変異の貝を見つけると、すぐ新種だと発表する。あとにいろいろ類似のものがでてくると、もう、その区別がつかなくなって、こんどは統合だ、合併だといって、またいじくる。こんなことをくり返しているから、われわれ素人は本当に迷惑しているのである。」

そのほか、「イセノナミマイマイ」と「ギュリキマイマイ」の殻の比較や軟体部の考察、あるいは、黒田先生の「日本非海産貝類目録」の分類を中心とした意見もあった。そして、この貝は「イセノナミマイマイ」がよいとか、「ギュリキマイマイ」でないかと、いろいろ論じている。また、陸貝は解剖を主とするのがよいのか、形態を主として名をつけるのがよいのか等々、さまざまの意見がよせられた。

3. 同定経過

東正雄先生が「イセノナミマイマイ」と同定されるまでには、毒舌家諸氏が考へている以上に、もっともっと慎重に取りくまれたことは事実である。少なくとも、先生がこの貝を解剖されなかったならば、あるいは「産地がものをいう」という陸貝の原則にしたがって、新亜種が誕生したかもしれない。そうなれば毒舌家諸氏のいい材料になっていたのであろう。

しかし、先生は慎重であった。最初この貝を *Senckenbergiana* クロイワマイマイ系でないかと考えられた時、先生御自身も多くの疑問をもたれたことは当然である。まず、手をうたれたのは「チビクロイワマイマイ」との解剖学的考察であった。そこで、さっそく「チビクロイワマイマイ」の生貝採集を試みられて、その上で決定しようとなされている。

「チビクロイワマイマイ」は美濃養老の滝以前に分布しているが、同時に美濃一円に分布している「イセノナミマイマイ」や「ギュリキマイマイ」も、この時比較考察の対象とされた。このことは、

「伊勢湾周辺からの交通機関、または植木、あるいは若木などによって、貴地に移入されたものかもわからない。又、庭園業者などによって、芝生が貴地に運ばれたものかもわからない。こうした移入経路についての詳細な調査をしてほしい。」

と、私の方へ連絡されている。

私の調べたところでは、この家は江戸中期ごろ、岐阜の方からこの地に永住されていることが

わかった。その他、この今立町はかつて武生（以前は府中といっていた）の打刃物といえば、全国的に広がっていたが、その行商人の多くは、ここ今立町の人々であったこともわかった。

東先生は、こうしたいろいろの基礎的調査を終えて、最後に剖見されたのである。

「野岡産 *Euhadra* 不明種、解剖の結果 *pheil*（矢襄）断面からみて、*Senckenbergiana* 種でなく、*eoae* 系統と断定する。伊勢湾周辺に広く分布する *E. eoae communis* *isiformis* イセノナミマイマイである。これは京都、山城、近江にも分布している。若狭には新知見黒田氏の古い文献には *Euhadra sandai communis* (?) と記されているのが、この亜種らしいと思うが、ともかく *Senckenbergiana* 系統でないことは明瞭になった。殻皮の模様についても多少疑念をもつが、解剖がいかに種系統の決定に大切であるかということを痛感した。なお、イセノナミマイマイの分布の北限と思う。」

という報告をいただいた。

なお「ギュリキマイマイ」との相異として解剖の結果では *genifal-syssfen* も「ギュリキマイマイ」とは、多少異なっているようである。西宮方面にもギュリキ型らしいものが多く見られるが、生物学分布の定説に従って、2 亜種が混棲しないから、イセノナミ型と思っている。「イセノナミマイマイ」は平地型で、「ギュリキマイマイ」は山地型である。貴地の野岡は平地であり、岐阜方面から的人為的分布と考えあわせてもよく、また *genifal* 系統も「イセノナミマイマイ」によく合致している。

このような見解で、この貝を「イセノナミマイマイ」と同定したという御意見もいただいている。

私としては「イセノナミマイマイ」でも、「ギュリキマイマイ」でも、別にどうということはなかった。また、それにこだわる気持ももっていない。ただ私のいいたかったことは、

「貝の世界にも、いろいろの問題がある。」ということを書いてみたかっただけである。したがって、焦点をそこにしぼったため、結果的には、東先生にも波部先生にも多大の御迷惑をおかけしてしまった。

波部先生は、この貝について

「『イセノナミマイマイ』と『ギュリキマイマイ』との明確な線を引くことはむつかしい。ただ、模式的にいえば『殻の周縁の黒帯の太いのがイセノナミマイマイで、細いのがギュリキマイマイとなる。この貝は殻も軟体もクロイワマイマイ型とは一致しないようである。また、ニシキマイマイ、コガネマイマイのように軟体の背面に黒縦帯がない（オカノマイマイには欠くこ

とがある)ニシキマイマイ、コガネマイマイのグループに入れることもできません。少くともこれはミノマイマイ型になると思います。」

といった御意見をいただいている。

続いて次のような御意見をいただいた。

「かたつむりについては、あまりむずかしく考えるとわからなくなる。細かい点はなかなかむずかしいことが多く残されています。これは要するに分けすぎているということです。今はいそがしいので手をつけられないが、いまの仕事が終れば、次は陸貝等をがっちりかたづけようと思っています——。」(6月25日)

4. むすび

「かたつむり騒動」が意外な方向に発展して、毒舌家諸先生を喜ばせたが、やはり落ちつくところに落ちついていくようである。このように、今までの経過を記してみると、東先生が「イセノナミマイマイ」と同定された理由も、よく理解できるであろう。同時に、波部先生の御指導にも、もし私が「このかたつむりは平地で採集したものです。」ということを申しあげておれば、平地型と御判断いただき、いろいろの疑問はあるにしても、おそらく「イセノナミマイマイ」と同定されたことであろう。

私は両先生とも、けっして間違っていないし、慎重な態度で御指導御助言をいただいたことに對し、深く感謝している。ただ、東先生は現地で直接採集され、波部先生は私のまづい経過報告をたよって判断されたため、このような相違になったのである。この点について、私は自らを深く反省するとともに、この一件でいろいろと教訓を得ることが多かったと喜んでいる。

さて、最後になったが、この一件をともかく落着させるために、大御所様黒田先生の御判断をいただくことにしよう。

「……住宅邸宅内から発見された由、多分原産地の植え木に付追して分布したものでしょう。この例は各地で考えられます。ナミマイマイの分布地でない四国愛媛八幡浜から発見されたことがあります。おそらく近畿の植え木屋の手で伝播されたものでしょう。」

なお、「イセノナミマイマイとは平地型であり、このものの山地型は「ギュリキマイマイ」で、この両者を別物扱いする方が間違いであり、私は東説を支持します。あたかも「ハクサイマイマイ」と「ツルガマイマイ」の関係の如く……。」(6月24日)

どうにか、この一件も解決できたようである。しかし、この間、黒田先生、波部先生、東先生はもちろんのこと、各地に在住の貝友先生からも、あたたかい御意見を賜わったことは、私の無上の喜びであった。諸先生方の御芳名は省略させていただいたが、御意見は漏さず記入し

たつもりである。ここに、謹んで深くお礼申しあげ「かたつむり騒動」一件の始末記といたします。

今立郡南越中学校長

註 福井市郷土自然科学博物館の展示されている貝のほとんどは同氏収集のもの。